

メッセージアウトライン

詩篇 37:1～5

「あなたの道を主にゆだねよ」

ダビデによる

[1-2]「悪を行う者に腹を立てるな。不正を行う者にねたみを起こすな。彼らは草のようにたちまちしおれ青草のように枯れるのだから」

ダビデによる詩篇である。ダビデは貧しい羊飼いの身分からイスラエルの二代目の王に神によって選ばれた人物で、イスラエルの歴代の王の中で最も神に近く歩んだ偉大な王である。彼は初代の王サウルからねたまれ、いのちを狙われ、各地の荒野や洞窟を転々とし、さらには敵対していたペリシテ人の地まで逃亡していた。そのような逃亡生活の中で、人間的に頼る者はなく、どこに行ってもサウル軍からいのちを狙われ、恐れと緊張と悩みの連続の逃避行であった。そのような中で彼はただ真の神のみにより頼み、祈り、叫び、涙しつつ神の守りと救いを願った。後に彼が主なる神のご計画のうちにサウルに代わってイスラエルの王となった時、当時の経験を思い返しつつ、多くの詩篇を作り、神を賛美した。この37篇もそのような中の一つである。

1 節では悪を行う者、不正を行う者に対して腹を立てるな、ねたみを起こすなど勧められている。それでは悪人をのさばらせることになるのではないかと思われるかもしれない。しかしダビデはそこにも主なる神の御手が働いていることを確信しているのである。彼らの最後はどうなるのか。2 節では「彼らは草のようにたちまちしおれ青草のように枯れるのだから」と言われている。つまり彼らは悪を行い、不正を行い続けると、時が来ると主が必ずさばかれ滅びてしまうので、主に信頼し、そのさばきにゆだねることを勧めているのである。彼は自分の経験から主が必ず彼らに正しいさばきが下されることを確信しているのである。(ダビデはサウルを決して悪人呼ばわりしていないことに注意)

[3]「主に信頼し 善を行え。 地に住み 誠実を養え」

神を信じる信仰者は悪人をねたんだり腹を立てたりする代わりにこのようにせよと言われる。

主に信頼し、主が与えられた地に住み、目立たなくても真面目に誠実に生きることの勧めである。

[4]「主を自らの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる」

悪を行う者の方ばかり見て、腹を立て、ねたみ、怒るのではなく、主を自らの喜びとすることの勧めである。主のあわれみや恵みを味わい、その中に憩うことは、この世の喜びにまさった喜びをもたらす。もちろんこれはこの世の悪や不正に目をつぶれ、沈黙せよということではない。現代では国は立法、行政、司法という三権分立制度があり、それぞれ独立の機関である議会、政府、裁判所が機能しており、この世の不正や悪はさばかれ、正され、あるべき正しい姿が追い求められている。それで悪を行う者は当然刑罰を受けることとなる。しかし、ダビデの時代は王にすべての権力が集中していた。それでも王や権力者、上に立つ者にしかるべき訴えをし、正しくさばいてもらうことはできた。しかし、その上に立つ王や権力者が悪を行う者であったならどこに訴えたらよいのだろうか。究極的にはそれは神しかない。ダビデはそのような環境の中で逃避行をしていたのである。ここで彼が教えていることは、悪に対して自ら手を下したり、復讐したりするのではなく、正しいさばきは主にお委ねして、自分のために最善をなしてくださる主を喜びとすること、そうすれば主はあなたの心の願いをかなえてくださるということである。しかし覚えていかなければならないことは、これは何でもかんでも願うものすべてが与えられるという意味ではない。主に信頼し、善を行い、誠実に生きていくときに、主はその信頼する者の願いに御心に従って誠実に答えてくださるという意味である。

[5]「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる」

「道」とは人生のこと。私たちの人生、生き方を主にゆだね、主に信頼していくとき、主は最善の御心をなしてくださる。私たちは人生において様々な悩みや苦しみに出会うとき、嘆き、つぶやき、自分で何とかしようとする。しかし、信仰者にとってそこに本当に必要なのは主への信頼であり、私たちの道を主にゆだねることである。そうすれば主が最善の時に私たちにとって最善のことを成し遂げてくださるのである。

これも注意しておかなければならないことは「主にゆだねる」と言ってもベッドに横たわって口を開けていれば必要な食べ物が降って来る、あるいは何もしないでも生活費が与えられるという類のことではない。

使徒パウロはⅡテサロニケ 3:10～13 で次のように言っている。「あなたがたのところにいたとき、働きたくない者は食べるな、と私たちは命じました。ところが、あなたがたの中には、怠惰な歩みをしている人たち、何も仕事をせずにおせっかいばかり焼いている人たちがいると聞いています。そのような人たちに、主イエス・キリストによって命じ、勧めます。落ち着いて仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。兄弟たち、あなたがたは、たゆまず良い働きをなさい」

またローマ 12:11～12 には次のように言われている。「勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。望みを抱いて喜び、苦難に耐え、ひたすら祈りなさい」

聖書は決して怠惰な生活の勧めをしておらず、かえって勤勉に働くことを命じている。そしてそのための知恵や能力や方法などを主に信頼し、主にゆだね、主に求め求めていくときに主は確かにその願いをかなえ、私たちにとって最善を成し遂げてくださるのである。

誰が貧しい羊飼いの少年がイスラエルの王になると考えたであろうか。しかし、ダビデは主の御心に忠実に従い続け、それが実現したのである。

誰がガリラヤの粗野な漁師ペテロがイエス・キリストに従う一番弟子になると思ったであろうか。

誰がクリスチャン迫害の急先鋒であったサウロが、やがて全世界を股にかけて福音を宣べ伝えるパウロになると思ったであろうか。すべては彼らが主の御心に従い、主に信頼し、自分の人生をゆだねて行った時に主が成し遂げてくださったのである。

私たちにも主は呼び掛けておられる。「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる」

神は天地万物を創造され、私たちを神と交わりのできる存在として創造された。しかし、私たちはその神にそむき、神の前に罪ある者となってしまった。→創世記 1～3 章 罪の結果は死と永遠の滅びである。

神は義であり、聖なるお方であり、そのため私たちをそのまま受け入れることはできない。しかし主なる神は私たち人間を愛し、私たちのために救いの道を開いてくださった。それは罪のない神の御子が人となってこの世に来てくださるという方法である。

神の御子イエス・キリストは私たちの罪を贖うためにこの世に人となって来てくださり、本来私たちが神のさばきを受けて滅びに行かなければならないのに、私たちの罪のさばきの身代わりとなって十字架にかかって死んでくださった。ここに神の愛と救いがはっきりと表わされている。そして私たちがこの神の御子イエス・キリストを自分の救い主として信じ受け入れるときに私たちは神の子とされ、永遠のいのちを与えられ、聖書に約束されている豊かな人生を歩むことができるのである。

私たちは過ぎ去った年月の守りと導き、祝福を感謝しつつ、来るべき未来も変わることなく主にすべてをゆだね、主に信頼しつつ歩んでいきたい。